

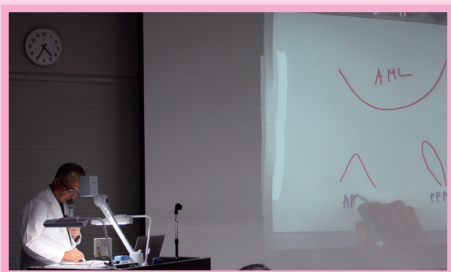


REPORT



KEIO MINI-MITRAL WORKSHOP 2011

～ Live Surgery & Intensive Lectures for Mini-Mitral Surgery ～



ライブ手術を担当した直後に講義を行い、その場で図を描きながら解説する四津良平教授

2011年12月10日、慶應義塾大学病院にて『KEIO MINI-MITRAL WORKSHOP』が開催された。本ワークショップは会場となった会議室と中央手術室を中継で結び、小切開アプローチによる僧帽弁手術のライブ手術が行われたほか、小切開・僧帽弁手術について多施設・多職種の演者による講義がなされた。「安全性」と「チーム医療」をテーマに行われた本ワークショップについて報告する。（ハートナーシング編集室・深見佳代）

患者さんに“優しい”治療法

「外科領域での低侵襲性というのは、追求してもしすぎることはない」と、Lecture12「低侵襲・僧帽弁手術の将来」で語ったのは、低侵襲心臓手術の第一人者である四津良平教授（慶應義塾大学病院）。その思いから、同院では15年前から胸骨を切らない肋骨からの小切開（約6cm）による心臓手術を開始した。

「術野がよく見えない」「良い道具がない」などの理由で国内での小切開手術の低迷期が訪れた際に、同院だけは途切れず取り組み続けたのも、「患者さんに“優しい”治療を提供する」というスタッフの共通目的があったからではないかと推測される。

小切開アプローチによる僧帽弁手術の現在の状況としては、「僧帽弁をみるのに適したアプローチであると認められつつある」「器具が進歩・確立されてきた」「本治療法を行う施設が増えてきた」そうである。このタイミングだからこそ、本治療法の導入を希望したり発展させたいと願う全国の施設スタッフに、疑問点や問題点、効果的な手技・手法などの解決をうながす目的で本ワークショップが行われたともいえる。

求められるチーム力

低侵襲を得るためには確立された器具や技術が不可欠である。それが達成されつつある現在も、「それ以上に大切なものは

チームワークである」と本ワークショップは伝えている。本治療法は人工心肺を用いることなどもあり、この手術に携わる多職種のスタッフは、非常に精密な技術・管理能力に基づいた協働が求められるからだ。



四津教授は、ワークショップをまとめる言葉として、「今日は技術をすべてさらけだした。自分たちが悩んだことを（皆さんが）悩む必要はない。どんなことでも自分たちに問い合わせてほしい」と参加者に語りかけた。その言葉に、患者さんに“優しい”治療法を、「求める人すべてと共有したい」という強い意志がうかがわれた。